

# 信 州 大 学

## 実 施 報 告

### (1) 【実施責任者報告】

信州大学学生部長 大 谷 毅

#### 1. 放送公開講座の大学における位置づけと放送局その他の関係機関との協力関係について

信州大学では、従来ほとんどの学部が「開かれた大学づくり」の一環として、学内施設を利用し、あるいは学部によっては進んで地域との相互交流を求め、特色ある公開講座を実施してきている。しかし、本学は各学部が県内の4地区に遠く分布しているため、これらの特色ある講座もキャンパス周辺居住者を対象とするにとどまり、したがって地区住民の学習内容も固定化するなど、なお不十分なものである。その点放送による公開講座はこれらの欠陥を補い、学習の機会をあまねく県下各地の住民に提供するものとして、その機能並びに効果が大きいと期待され昭和60年度からテレビ放送公開講座を、また本年度からラジオによる放送公開講座を実施させていただいている。

一般の公開講座は各学部独自の実行委員会によって企画・実施されている。これに対して、放送による公開講座は、学部長会議の議を経て、提案された複数科目の中から、より適切と思われる科目を選定する。この間必要に応じて、実施責任者が放送会社並びに後援団体などとの連絡調整をおこなうが、以後の細目などは、主任講師とテーマ・リーダーからなるプロジェクトチームに一任され、実施責任者は推移を見守るだけである。

本講座の放送を担当した信越放送は、放送時間の決定、多数回にわたる遠隔地での映像・音声等の取材、放送台本の作成、番組の告知放送などの番組の作成にあたった。例年どおり、本講座の後援（名義使用）を県内主要団体等に依頼し快諾を得た。なお、テレビ科目について全国農協中央会の後援を得ようとしたけれども、時間不足であった。特に、長野県（社会部・農政部）、同教育委員会、同農協中央会、同連合婦人会、同森林組合連合会、同木材協同組合連合会、同書店商業組合、同消費者の会連絡会、長野営林局などには受講生の募集にあたって積極的な対応をいただいた他、県内市・町・村広報紙及び各新聞社にも番組告知について掲載の便宜を得た。

#### 2. テーマの選定とそのねらいについて

今回テレビは農学部、ラジオは教養部に所属する教官グループが中心的役割を担った。農学部は伊那市郊外にあり、本部のある松本市からおよそ片道1時間半～2時間、放送会社のある長野市まではおよそ4時間の時間距離にある。鉄道、自動車何れの移動手段を使っても、この時間距離では

短縮できない。遠隔多媒体教育を検討するフィールドとしては格好であろう。

ラジオのテーマについては今回担当者が、もともと当エリアでの知名度があったこともあって、放送会社側の推薦があった。

テレビのテーマについては、当初、放送会社は難色を示していたけれども、討議の末、見通しを得てスタートしたものである。大学と放送会社の関係は極めて良好であったと考えている。

#### 1) テレビ放送公開講座について

わが国の農林業は、国の内外からの厳しい批判にさらされており、農家は主体的な経営意欲を低下させている。しかし農林業は人類の生存にとって欠くことのできない衣・食・住及びエネルギー資源を供給する重要な産業であることは将来においても変わらない。しかしながら、今後日本の農林業が対応していくためには、すぐれた人材と、研究開発に基づく高度の技術革新を大きなよりどころとしなければならない。永続的に農林業を展開させていくには、それが立脚する自然の法則を最大限に活用すべきであり、したがって農林業に関する技術も自然と共存していくものでなければならない。

そのような風土に適した「ハイテクノロジー」を確立させて、わが国の農林業を自立できるようにし、夢のある展開をしていくための方途について考えるのが本講座の主要テーマである。かかる農林業のハイテクノロジーについて、農林業の研究者だけでなく、生産者である農家、さらには一般消費者、将来実社会で活躍する学生にも御理解いただきたいという立場から、今回の科目「農業新戦略」が選定されたのである。

本講座では、学生、一般消費者及び農家・農林業関係者を主対象と考えた。そして、①学生に対しては、本講座を教養部での授業に活用し、農林学研究の成果を修得させ、②一般消費者に対しては、国民の健康の維持・生活の向上、さらには住みやすい環境の保全に農林業の果している役目を学習してもらい、③農家及び農林業関係者には、解説した基礎技術や応用技術から示唆を得ることによって、技術導入の一助としてもらう、という3つのねらいを定めた。

#### 2) ラジオ放送公開講座について

ラジオ公開講座の第1回は、「近代信州の女性たち—歴史・文学・芸術にさぐる—」とした。わが国の女性問題は、国際婦人年もひとつの契機となって、新たな段階を迎えているといつてよい。母性保護と女性の社会参加の問題について、種々の議論および女性の役割が、その「生む性」としての独自性をいっそう豊かにしながら、社会・経済・政治から教育・文化にわたる多彩な領域において、ますます重要性を増すことは周知のところである。

ところで、女性問題を考えるとき、地域的な特色を見落すことはできない。信州という地域社会に立ち入ってみると、女性問題は、社会の地域性や風土と歴史、そこに住む人々の社会観・人間観と深くかかわっている。したがって、信州の女性たちの日本近代化のなかに生きた歩みをたどりながら、かかえていた課題、それらの解決、生活を豊かに楽しくするよりどころが何であったかについて、今日的な視点をも考慮して、地域史の展開のなかで多面的に検討しつつ、女性問題を解明することも、19%を占める本学の女子学生に、女性問題を学問的学際的に考察する

機会を設けるとともに意味のあるものと考えた。

さいわい、信州大学教養部では、総合科目「信州の自然と文化」が開講されており、8学部の教養課程の学生200名ほどが、毎年受講しており、その講義内容の一部を生かして構成した。

①学生に対しては、総合科目「信州の自然と文化」の授業や参加教官の担当科目に教材として活用出来、②県民各層に対しては、婦人諸団体や県・自治体の公民館活動などにおいてすすめられている女性問題についての、学習・実践に役立ててもらい、③職業についていたり、家庭にある女性たちにも、日曜日の夜を放送時間に当てることによって、聴取・学習の機会に活用してもらうよう配慮した。

### 3. 番組・印刷教材・学習指導の関連づけについて

#### 1) テレビ放送公開講座について

放送番組では、農業新戦略として生産技術面を中心とし、環境技術面にもわたってとりあげた。それに対して印刷教材においては、文化、生産、環境、加工・流通にわたって「続・自然との共存—農業新戦略—」としてとりあげ、放送番組になかった部門についても紹介し、より明確に全体像を示すようにした。

また、学習指導については、産業部門との関連を重視して、放送番組を整理し、畜産、品種・野菜、森林・木材、風土・地力・水、果樹・害虫というテーマを設定した。

#### 2) ラジオ放送公開講座について

放送番組では、近代信州に生きた女性を具体的に取り上げて、歴史・文学・芸術にわたる多面的な検討を行い、できるだけ関係者の証言、当事者の作品や回想・手記などを講義のなかに生かすよう工夫した。また、主任講師は、すべての講義の最初に、その回の講義内容の全体のテーマのなかでの位置づけを試みる。担当講師と2、3のやりとりをすることによって、講義内容の相互関連、当該講義のおもな問題について、聴取者が理解しやすいように配慮している。放送の内容は、印刷教材の内容を生かしながらも、できるかぎりラジオ放送にふさわしい独自の構成を目指し、アナウンサーの朗読、生の証言を間に入れるなど、多元構成に努めた。

印刷教材においては、音が生命のラジオ放送を補うため、写真・図表などを多くした。また、独自の読物としても意義を持つように、『信州の近代化と女性—歴史・文学・芸術にさぐる』を作成した。受講案内・ポスターについても、信州出身の近代日本彫刻の確立者荻原碌山の作品として知られる「女」をシンボル・マークとして用いた。

また、学習指導については、長野県が広域であり、取り上げる女性が地域的な特色をもっていることなどから、第1回を講義内容の進み具合と関連する講師を中心に、県内4カ所で行うよう立案した。また、第2回は教養部で全講師が参加して、総合的に全内容について学習できるように設定した。なお、第1回のA会場で行った学習指導の際には、予想しなかった遠隔地からも参加者があり盛会であったので、参加者の期待に応えるためにも、疑問や発言への対応を重視した。

#### 4. 番組の学習効果について（講師の印象、受講生の反応等から）

##### 1) テレビ放送公開講座について

本講座で番組出演した講師の数が27名であったため、全員が本講座の主題に対し共通の理解を深めることが番組に臨むにあたりまず必要であった。そのため、番組の制作にあたっては全体の基本構想を何回か討議し、それぞれの講師が主題に対する共通認識と理解を持つことに最大の努力を払った。幾度にもわたる打合せ会議を通じ、①講義目的の明確化（特に、明日の農林業に対し夢のある明るい内容とすること）、②講義内容の一貫性、③一定の教育水準について徹底的に話し合い、共通した合意点を各人が認識し、講義に臨んだ。

また、講義に当たっては、学習効果が上がるよう最大限の努力をした。すなわち、映像を通じて理解を深めてもらうよう留意し、放送内容に関しては、出来るだけ現場や実物を示すことに努めた。また、講義内容も図表化出来るものは極力フリップを用い理解しやすいようにした。さらに、各講師は講義調ではなく女性アナウンサーに受講生を代表させるかたちでいろいろ質問させ内容を深めるとともに、聞きやすい講義になるよう努力した。

アンケート調査による学習効果の評価が未だ完了してはいないが、農業新戦略というテーマの性格上、われわれに最も身近なしかも最も重要な内容であったために、学歴、年齢を問わず多くの人々にかかなりの興味と刺激を与え、学習効果も十分上がったものと考えられる。各スクーリング会場が常に満員の盛況であったこと及びきわめて熱心な討論による時間の不足などから、こうしたことは推察されよう。

今後はアンケートによって、内容の理解度、講座から得られた農林業に対する新しい指針、講座によって今後大学と地域社会との関連等々を詳しく調査解析し、今後のこれらの講座の参考に供したいと考えている。

##### 2) ラジオ放送公開講座について

本講座は、昭和62年12月から昭和63年3月にかけて実施するため、1月24日現在、14回中の7回を終了したところである。したがって、学習効果について、アンケート資料などに基づいた状況を明らかにできないが、放送の開始以前から反応があり、県民の女性問題への関心の高さが観察された。祖母の日記の提供の申し出、書簡・電話による感想や質問が、現在までにいくつか寄せられている。担当放送局の聴取率調査でも、当初予想した以上の良好な反応（第1回放送聴取率0.7%）がうかがえた。

第1回の学習指導では、3時間の予定時間一杯、熱心な質問や感想・意見が寄せられた。この学習指導の内容に関連した質問も、その後、手紙で寄せられているので、アフター・ケアを大切にしたいと考えている。

#### 5. 印刷教材の作成過程について

##### 1) テレビ放送公開講座について

本学には放送公開講座のための特別な委員会はないので、担当講師の中から4名のテキスト編

集委員を選定し、以後、テキストの作成をこれに委ねた。

- ・テキストの書名 続・自然との共存—農業新戦略—
- ・編 者 菅原 聡・熊代克巳・森本尚武・細野明義
- ・出 版 社 共立出版（東京・小日向）
- ・価 格 1,900 円
- ・テキストの構成 第1部 風土と地域文化  
第2部 生産  
第3部 環境保全  
第4部 加工・流通

・執筆に当たっての配慮

- ① 受講生の予習・復習に必要であり、かつ、教科書として、あるいは独立の読物としても使用できるように考えること。
- ② 大学教養部学生に理解出来る内容にすること。
- ③ 叙述は出来るだけ平易にし、専門用語を少なくすること。
- ④ 外国語などはやむを得ない場合以外は使用しないこと。
- ⑤ 数式や構造式などは最小限にすること。
- ⑥ 写真や図を出来るだけ入れるようにすること。

・作成過程

- 1 2月17日 共立出版株式会社へ出版を依頼し、承諾を得る。
- 1 2月18日～1月20日 執筆者を決定し、さらに執筆内容並びに執筆要領を検討・決定する。
- 1月30日 共立出版株式会社との意見交換を行う  
(テキストの基本的性格、体裁、執筆要領、編集、校正、発行部数、発行日  
価格など)
- 2月 2日 各執筆者に執筆要領と原稿用紙を配布し、執筆を依頼する。
- 4月30日 原稿締切
- 5月 6日～20日 編集委員が提出原稿を精読し、文体・図表などの体裁を整える
- 5月20日 共立出版株式会社へ原稿送付
- 7月中旬～8月中旬 校正：初校は各執筆者が、2校：3校は編集委員が担当する。
- 9月20日 初版1刷発行(3,000部)
- 10月20日 初版2刷発行(1,000部)

## 2) ラジオ放送公開講座について

この講座の決定が、昭和62年5月と遅れたため、放送内容と講師の決定をみて、印刷教材を作成するのに時間を充分当てられなかった。しかし、総合科目「信州の自然と文化」による経験や講師の相互理解があったので、時間を有効に活用できた。5人の講師のなかから、主任講師を

含め3人が編集に当たり、一般の著書の性格をもたせた印刷教材とした。

- ・テキストの書名 信州の近代化と女性 ―歴史・文学・芸術にさぐる―
- ・編者 上條宏之・西村真一・仁科 惇
- ・出版社 銀河書房(長野)
- ・価格 1,800円
- ・テキストの構成 はじめに―信州の近代化と女性・序論
  - 1部 歴史のなかの女性
  - 2部 島崎藤村の文学と女性たち
  - 3部 近代芸術と女性たち
  - 4部 近代詩歌と女性たち

・執筆にあたっての配慮

- ① 社会人が、独自読物としても購読でき、出来るだけ平易に読めるようにすること。受講に当たっては、予習・復習に独力でも取り組める叙述に心がける事などを基本に据えた。
- ② 大学教養部生の読書の対象としてもふさわしい体裁と内容をもつこと。
- ③ 類書があまりなく、独創性をもち、写真や図表・年譜など工夫した構成とすること。

・作成過程

- 6月 テキストの内容について、参加講師5人による会議をもち、内容構成・執筆要項などを決定する。出版社を銀河書房として、編集・出版担当者を含めた会議を重ねる。放送内容とも関係するので、放送会社のディレクターに参加を求めた。
- 7月～8月 執筆者による原稿作成、写真・図表・年譜などの選択・作成。
- 9月 出来あがった原稿から編集を進め、銀河書房に渡す。
- 10月～11月 校正を2校まで執筆者が行い、編集者が、全体の調整を加える。3校は編集者が、出版社へ出張して当たる。  
写真の一部取材は、出版社が担当し、すべて著作権は出版社がクリアする。執筆者も調査を兼ねて、写真・資料を一部補充した。
- 11月24日 初版発行(3,000部)

6. 学習指導の実施状況について

1) テレビ放送公開講座について

回 略称	分科会の名称	関連する放送	実施場所	実施日時	出席講師 *： 会場主任講師	出席 者数
1 畜産	安くて美味しい乳肉卵を求めて	資源を活かす畜産 ミルクの神秘	長野市 長野県食品工業試験場	昭和62年 11月14日(土) 10時~12時30分	*細野、大谷 檀原、唐沢	人 60
2 品種 ・野菜	作物の品種開発 野菜栽培新技術	品種で勝負 野菜づくり再前線	長野市 信州大学工学部	昭和62年 11月21日(土) 13時~17時	*氏原、有馬 藤森	58
3 森林 ・木材	林業を考える	森を育てる 間伐材を活かす	佐久市 長野県佐久創造館	昭和62年 11月28日(土) 9時45分~12時	*有木、只木 重松、宮本 酒井	126
4 風土 ・地力	土づくりを考える	風土と農業 土づくりを考える	松本市 信州大学教養部	昭和62年 12月5日(土) 13時~17時	*熊代、伊藤 松田、高橋 松下、酒井	100
5 水	水資源を考える	緑のダム-森林- 汚水も貴重な資源	岡谷市 岡谷市公民館	昭和62年 12月12日(土) 13時~17時	*酒井、松田 只木、桜井 中野、入江	51
6 果樹 ・害虫	くだもの づくり 害虫防除	うまいくだもの づくりこれからの 害虫防除	飯田市 飯田中央農協 飯田支所	昭和62年 12月19日(土) 13時~17時	*熊代、森本 富田、北村	92
全 体 会		夢のある農林業 をめざして及び全放送分	南箕輪村 信州大学農学部	昭和63年 1月9日(土) 13時~17時30分	一部を除く全 講師出席	102

このほかに、「信州大学農学部附属高冷地農業実験実習施設(野辺山)見学会」(昭和62年8月26日)、「信州大学農学部見学会」(昭和62年9月17日)を行って、それぞれ37人及び66人の参加を得た。また、南佐久郡川上村では、本放送公開講座の全番組を村内の全戸に再放送を行ない、川上村に対しての学習指導を昭和63年3月13日に実施した。

2) ラジオ放送公開講座について

県内5会場で実施し、第1回(1月16日)伊那市会場では39名の受講生が出席した。

7. 「大学教育の地域社会への開放」に果たす役割について

1) テレビ放送公開講座について

今回の主任講師や関係者は、従前から研究教育あるいは公開講座などを通して、中堅中小企業をはじめ農業関係者など関連する産業人とのかかわりをかなりもっていた。今回の放送講座は、そうしたかかわりを一層強固なものにする気運を盛りあげたばかりでなく、新しい交流がスタートするきっかけも作った。後援を得た農林業団体や消費者組織では、放送講座のテキストの購読に積極的であり、所期の目的を幾分でも果たせたと思われる。また、予定以外のスクーリングを

要請され、地域社会との交流強化に向けて今後の基盤をより確固にする役割を果たせた。

なお、前項でも述べたが、新しい試みとして、放送教育開発センター及び番組制作放送会社の協力を得て、南佐久郡川上村営有線テレビを利用して再放送（12月5日より毎週土曜日に放映）を行い、3月13日に学習指導を実施した。

## 2) ラジオ放送公開講座について

今回のテーマの背景には、女性問題について、長野県連合婦人会の信州婦人大学講座などの連続講義に、講師として参加した経験者が多く存在することがあった。今回のラジオ放送公開講座「近代信州の女性たち」について、同じようなスタッフと内容による公開講座を、違った形で開設して欲しい旨の問い合わせがきており、今後のこの分野の大学開放化にはずみをつけることとなるだろう。

## 8. 「大学の授業への活用」の状況と今後の可能性

本学では昭和63年4月からキャンパス間「画像情報ネットワークシステム」が一部オープンする。この問題は、遠隔地多媒体教育の手掛かりとして本学では格別な意味をもつようになりそう。

### 1) テレビ放送公開講座について

本講座のテレビ授業は、教養部並びに農学部において関係する講義科目の中でおこなわれた。本講座は、教養課程の学生を主対象と考えて作成されたものであるから、昭和63年度からは、本講座の全体について信州大学教養部の講義「環境科学Ⅱ」において活用していく予定にしている。そのほかに、農学部などにおいては、それぞれのビデオを関係する講義科目の中で活用していくことになっている。

### 2) ラジオ放送公開講座について

今回のラジオ放送公開講座は、信州大学教養部の総合科目をひとつの基盤としている。大学で行っている授業の一部を活用したといった性格をもっている。今回の放送講座で扱っている教材のなかには、大学の授業に活用するにも極めて有効なものがある。ただし、45分の講義を13回という時間数も、独立した講座として教養部の講義科目に位置づけるには、問題点もないではない。今後、今回の経験を活かし、より広範な可能性を追求していきたい。

## 9. 実施上の問題点と今後の課題等について

### 1) テレビ放送公開講座について

本講座はわが国の農林業の今日的意義を説明するだけでなく、明日に向かっての夢のある明るい展望をしめすことを使命とし、かつ講義内容を農林業に携わる生産者に対しても、また一般消費者に対しても役立つ内容にしようとしたところに難しさがあった。しかし、生産者と消費者の両者を見つめたかたちのスタンスのとり方は、本講座全体に内容の広がりや話題の豊さを与え、結果的には魅力と面白さが加わった講座となったと思われる。視聴者に求めたアンケートの集約が終了すれば別の視点に立っての本講座に対する問題点の指摘が出来ると思われるが、主任講師



やテーマ・リーダーから現時点で考え出される問題点と今後の課題として次の事項があげられた。

① 「大学群」として本講座は実施されたが、他キャンパスの教官との連絡、調整、打ち合わせに大きな時間と労力的負担を要した。これを少しでも軽減する方法が必要である。

② 「信州大学」放送講座をどれ程「信州」の大学講座となし得たであろうか。つまり、地方色を十分に出し切れたか。

③ 「地方社会への開放」と「大学の授業への活用」の両者に放送講座を役立てることが本来の趣旨ではあるが、実際は両者の間にはレベルの点でかなりのギャップがある。したがって、今後は「地方社会への開放」という視点で大学放送講座を行った方が良いように思われる。

④ 今回の受講生の確保は、講師の自主的な働きかけが大きい。関係者のなかには果たしてこれで良かったのかという意見もあった。

(なお、実施責任者としてはこういう努力こそ貴重なものであり、大学開放化との重要な手掛かりになると思料している。)

⑤ 長野県は広い面積を有していることから、スクーリングの回数や場所をもっと増やす必要があったのではなかったか。

⑥ 再視聴を希望する人が極めて少なかった。

(このことの原因にはいろいろ考えられるが、実施責任者としてはニーズがなかったと考えている。)

⑦ 専門用語を理解させるために頻繁にスーパーで示すべきであった。

⑧ コンピューター画面のテレビの再生処理に関しては、必ずしも良質な画像が得られなかった。

⑨ 受講生の登録やアンケートで回答を求める際、学歴を問うことは受験登録やアンケートの回収をするうえでマイナス要因となった。

⑩ 放送時間帯、エリア(できれば隣接県、中部圏への拡張可能性)、予算の制約、スタッフの多忙さなど、実施の過程でまだ実施後、種々話題が出た。

なお、主任講師の言によれば、「学内関係者の絶大なる協力態勢が確立されたこと、加えて放送会社の絶大なる協力のもとに、実施出来たことが本講座の成功した大きな理由であり、実施上の問題点として、学内の協力態勢にかかわる事項をあげる必要がなかったことは実に幸せなことである」とのことであった。

## 2) ラジオ放送公開講座について

信州大学におけるラジオ放送公開講座は、今年度から始めたところであり、目下進行中である。「学内での合意が、組織的なものにまで高められるのが理想であるが、十分とは言い難い面もある。」「講義科目を継続的に設定すべきだ」という意見も一部にないではないが、内容的には地域社会や社会人のなかにも支持があり、学内者の批判の声もとくに聞かない。現在のところ、総じて期待する声が届いている。

ラジオ放送公開講座の講義内容は、メディアの特色の違いから、テレビのそれと違う特色を生かす必要がある。しかし、テレビに比べると、より多くの人びとに、講座の存在そのものを知っ

てもらうことに時間がかかるけれども、聴取者の聞きやすい時間帯に放送時間を設定できる利点があるように思われる。

## (2) 科目担当主任講師の所見

(テレビ科目) 農業新戦略 ― 夢のある明日の農林業をめざして ―

主任講師： 農学部教授 菅原 聰

農林業は、わたしたち人類の生存にとって欠かすことのできない衣・食・住及びエネルギー資源を供給する重要な産業である。しかし、経済の高度化と国際化に対応した農林業の発展を図るためには、すぐれた人材と研究開発にもとづく高度の技術革新を大きなよりどころとしなければならない。しかも、農林業の技術は、それが立脚する自然の法則を最大限に活用する方向で開発されなければならない。ここに農林業におけるハイテクノロジー確立の課題が見出される。本講座では、そのような方向を模索することを中心テーマとして、農林業の現代的意義及び技術的視点から、わが国の農林業が自立し、夢のある展開をしていくための方途を考えることにした。そのような夢のある明日の農林業をめざすような話なので、学生だけでなく、農林業の生産者や一般の消費者にも受講して欲しいと考えて、積極的に受講生を募集することにした。そして、農協などの諸団体や報道機関の協力を得て約3,000名の登録申込みを得ることができた。

放送による公開講座においては、「大学教育の一般社会への開放」と「授業への活用」といった二つの異なった目的をもっている。今回の講座は信州大学の8学部の教養課程の学生を対象として、昭和53年より教養部において開講している講義「環境科学Ⅱ」に肉付けをして構成したものであるから、両方の目的を達成できると思われるが、一般の受講生には映像を中心に、学生や技術者にはテキストを中心に受講できるように考慮した。

授業への活用については、昭和62年度においては、教養部と農学部の講義のなかで一部おこなってみたが、昭和63年度からは、教養部の講義「環境科学Ⅱ」において活用していくつもりになっている。

テキストについては、教養書としてや入門書としての評価が得られており、初版の3,000部を売りつくし、その後1,000部が増刷された。

学習指導は県内全域をカバーして県内6カ所の会場で、いくつかのテーマを組み合わせで実施した。各会場でのテーマを明確に示したことによって、意識の高い受講者が集まり、活発な検討がおこなわれた。学習指導会場での印象から、大学教育の一般社会への開放に、放送公開講座が大きく寄与していることが知られた。また、今回の講座を核として研究会や勉強会などが開かれるようになったことは、きわめて喜ばしいことといわなければならない。

ただ、今回の講座には27名におよぶ多数の講師が参加したので、各人の持分が少なくなり、十分に見解を示せなかった点もあった。それだけに、今後のアフターケアをも心がけなければならない

と考えている。

昭和62年度のテレビ放送による信州大学の公開講座も、SBC信越放送の深い理解と積極的な協力によって成功裡に終えることができた。また、司会役の女性アナウンサーの助力によって多くの講師はうまく話しを進めることができた。これらのことに対して心からの謝意を述べたい。

(ラジオ科目) 近代信州の女性たち ー歴史・文学・芸術にさぐるー

主任講師： 教養部教授 上 條 宏 之

今回のラジオ放送公開講座は、信州大学として初めての試みであり、主任講師の手探りの取り組みと教養部・人文学部の4人の教官の積極的な協力、テレビ放送公開講座の3回目を迎えた放送公開講座実施責任者の学生部長を始め担当事務官の経験を踏まえた全面的な支え、担当放送局である信越放送局の関係スタッフの積極的な協力で組み立てられた。

「近代信州の女性たち」のテーマは、長野県における各層の女性が、様々な機会を自ら作りだして、積極的に学習しており、この問題に関する聴取者のある程度存在する可能性が予測できた。一方、講師陣の5人は、主任講師をプロモーターとする教養部の総合科目「信州の自然と文化」への参加、日常の大学における教育・研究、さらには、長野県における社会教育への関わりなどの点で、相互に近い場にいたという利点があった。主任講師と信越放送の関係スタッフや出版を担当した銀河書房との、この問題に取り組む前からの関わりも有効に働いたとあってよいであろう。

しかし、急に浮上した講座の性格上、放送開始に至る過程で、なかなか克服し難いところがあった。講座のテーマ、目的、内容の設定については、比較的スムーズに運んだが、テキスト・受講案内・ポスターの作成、受講者の募集などは、実施責任者の学生部長を始め事務当局の取り組みとともに、主任講師が、外部の関係者との接点を求めながら、時間に追われながら進めた。その際、4人の講師の方がたの全面的な協力が最も大きな支えとなった。

この放送講座の第1のハードルは、受講者の応募であった。300名の受講者定員に対して、530名を越える応募が、比較的自然で積極的にあったことは、この講座の成立するポテンシャルが、長野県民の間に高かったからである。後援諸機関・諸団体は、全般に好意をもって対応してくれ、県連合婦人会などのとりわけ積極的な支援があった。ただ、受講届を出すメリットが必ずしも明瞭でないため、受講届を出さずに放送利用をしている人びとがかなりあり、第1回の学習指導に、受講届をしていないが、参加した人びとが何人かいた。受講登録を行う積極的なメリットについて、一考が必要に思われる。なお、受講者の応募が比較的スムーズであったのは、5人の講師のこれまでの社会教育との関わりが宣伝の不足を補い、積極的な要因として働いたことがあったと思われる。さらにいえば、全体に地域住民の信州大学への期待の強さが背景にあると考えられる。ただし、こうした講座の存在を、地域社会に周知徹底させる方法は、今後さらに研究する必要がある。

この講座の成立するために必要なテキスト作りが、第2のハードルであった。信州大学のラジオ公開講座の発足年であったことが、内容の確定、講義内容の執筆に十分時間を当てる余裕を与えなかつ

た。これは、講義内容の総合性や相互関係をどうつけるかといった課題を、放送録音の際に持ち越している。もっとも、テキストの叙述と放送台本には、また別の配慮が必要である。その点で、放送局のディレクターと担当講師の緊密な連絡と、主任講師と担当講師の録音に当たっての討議は、欠かせない要件であり、第3のハードルといってもよいであろう。

また、ラジオ放送公開講座における聴取者との関係は、基本的な問題となろう。1回1回の放送を、受講者がどう受け止めているのか、疑問や批判をどのように抱いているのかが、講義者に伝わりにくいのである。学習指導の機会が、それをカバーする基本的な機会であるが、その時どきの反応を確認することは困難である。ひとつの方法として、受講者代表に、講義の録音の際に参加してもらう方法を検討してみたが、45分の講義時間でひとつのテーマを掘り下げ、かつ受講者代表の反応を取り入れながら講義することは、無理であるとの一応の結論に達した。ある程度、放送日に先立って録音することも、受講者の反応を、次の講座に生かすににくい条件となっている。放送直後の、電話・ハガキなどによる疑問の提示の方法が可能かどうか、研究課題となろう。これらを、受講届を出す際のメリットに位置づけることもありうるように思われるが、より根本的には、大学及び担当放送局の位置づけが問題となろう。

次に学習指導(スクーリング)に関して述べておこう。全部で5回を予定しているうち、1回を終了しただけの現在では、経験から引き出すものは、まだあまりない。ただ、年齢・性別・生活・関心が多様な受講者の求めに、どう応えるべきかについて、講師と受講者双方の事前の準備、大学独自の講義内容にもわたる質問項目も含めたアンケートの回答を時間のなかにとりいれた学習指導の持ち方、などが必要であることに気づかされた。夫婦で小さな子供の手を引いての参加、極めて現代的な生き方を模索している若い母親、講義内容の個別的な史実についての専門的な質問をする人など、多様であった。なお、放送局のディレクターに参加してもらい、時折、発言してもらったのは、有効であった。

放送講座の内容には、大学の側の講師陣のチーム・ワークと放送局の側のディレクターの見識や意見の積極的な提示が大いに関係する。現在、比較的うまく進行しているとおもわれるが、今後、講師が受講生・聴取者・学習指導参加者との間に存在する、ラジオというメディアによって隔てられている間柄を、どれだけ克服できるかが、課題であるように思われる。

## 制作報告

## (1) 制作責任者報告(テレビ)

信越放送制作部副部長 小林晋作

## 1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

日本の農業をとりまく環境が厳しいものであることは、衆知のとおりである。生産者米価の引き下げや農産物の自由化攻勢、アグリビジネスの進出、従事者の高齢化、後継者不足など暗い話題がことかかない。こうした中で、我が国の農業が風土を生かしながら自立して発展の道を歩むためのポイントについて、最先端の学術研究や技術動向をまじえながら詳しく解説する番組にした。

この番組の基本テーマの決定をみるまでに62年1月から3月下旬まで信州大学と信越放送の間で数回にわたって会議を開き協議した。特に問題になった点は、農業を取り巻く経済動向が流動的であったことである。したがって今年度は風土とのかかわりあいの中で技術論を中心に13回のテーマをしぼった。

今年度の講座でも長野県をはじめ市町村や農協など37団体の後援をいただき、受講生は生産組合員ぐるみの農家650人のほか市町村や県の農林・産業関係者、農林関係企業に加え異業種展開を図る一般会社、消費者、主婦など3,000人をこえた。

## 2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

今年度の「農業新戦略」では、信州大学農学部の19人の教官がそれぞれ専門分野を担当したほか、経済学部・理学部・工学部・繊維学部・教養学部など他学部のスタッフや県の農林関係試験場などの技術者の協力を得た。そのため主題の一貫性を保ち各講師間のレベルやスケジュールの調整に当たられた主任講師のご苦勞は並々ならぬものがあったものと思われる。

番組の制作では、一昨年の「エレクトロニクス」昨年の「生命工学」よりも、より身近な分かり易い番組とするため東北から関西地方まで国内各地に取材し豊富な映像を挿入するよう心がけた。他大学や関係企業の協力をいただいた。

## 3. 番組の視聴状況と成果(評価、反応)について

今回の講座では出演願った農学部の教授をはじめ関係者は計27人にのぼった。やや多すぎた感はいなめなかった。来年度からは13回で8~10人ぐらいにしたいものとする。

農林業をテーマにする場合、テーマの決定は前年の秋に決まっているのが理想かもしれない。果樹をとりあげたケースで果物の収穫シーンが収録時に間に合わず放送の直前に差し替え挿入するというケースもあった。

#### 4. 実施上の問題点と今後の課題等について

今年度の番組制作は“時間と距離”に苦労した。信州大学の農学部は伊那谷の上伊那郡南箕輪村にある。県庁所在地の長野市から1日3往復の直通列車で片道3時間、自動車でも3時間30分かかるといふ距離である。取材は5月からとりかかったが、植物や昆虫はカメラマンの都合を聞いてはくれない。放送では1～2分といったシーンでも1日掛かりで出掛けることになる。しかも天候が大きく影響する。気温が低くて昆虫の動きがにぶかったり、好天が続き野菜や果樹の成育がすすんだり自然を相手は大変である。

テレビ出演を初めて経験された講師の方々も多かったが、多忙にもかかわらず取材やVTRの編集に立ち合っただけで指導いただいたことに感謝している。

#### (2) 番組制作担当者の所見

(テレビ科目) 農業新戦略 — 夢のある明日の農林業をめざして —

制作担当者： 信越放送制作部副部長 小林晋作

今年度も放送時間は、土曜日の午前10時から45分間で視聴率調査の結果は0.6%であった。テーマからして視聴対象者は農業関係者が多くやや難点があったかと思われる。しかし紹介事例などについて放送後、電話による問い合わせが多数あった。

長野県川上村からは放送期間が高原野菜の収穫期に重なりとても視聴出来ないで村営のCAVTで冬期間に再放送したいとの申し入れが信州大学を通じてあった。川上村は農業総生産額が年間90億4,300万円をこえ長野県下でも最も高い村である。しかし連作障害や産地間競争が激しく厳しさが増していることから、この講座を村をあげて視聴し「考える農業をより進める契機にしたい」からということであった。こうしたケースは初めてのことで“あくまでも実験的な試み”として12月5日から週1回の再放送となった。スクーリングは3月末を予定している。

農学部で開かれた1月9日の終了式を兼ねた全体会には受講生が約100人出席した。「夢のある農林業をめざして」のテーマで全体のまとめをした後、質問箱を用意して講師陣が質問に答えた。質問は農業の展望から具体的な技術論にまで及び時間切れになるほどであった。今年度の講座では全体会の他に長野県内6カ所の会場で分野別のスクーリングが行われのべ593人が参加したが、このうち全会場に出席した受講生もいた。新潟県に近い飯山市で水稻や果樹など1.4haを耕作する老人で、県の南端にある飯田会場のスクーリングの時は朝6時に自宅を自家用車で出発し帰宅したのは夜の10時すぎであったということである。この機会に「農業を原点から考え直してみたいと思い受講したが、大変参考になった」と喜んでた。この間にとったノートは2冊に及び、これをもとに地域の農業後継者と冬期間、議論してみる計画だと話していた。こんな話を聞くと番組制作者冥利につきる。3月下旬に予定されている川上村スクーリングでは、どんな受講生の反応があるか楽しみだ。

(1) 制作責任者報告

信越放送ラジオ局制作部長 田中良彦

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

この公開講座は、地方大学としての信州大学の機能とラジオメディアの特性とが結合したことによるものである。

そのため今回のテーマにみられるように、地域性を重視し、かつ単に大学の講義をそのまま放送にのせるのではなく、一定の学問的水準を保ちつつも、一般聴取者に理解しやすいことを基本姿勢とした。

番組制作に当たっては、大学側と何回か打ち合わせを行い、信州といった地域社会で力強く生き抜いた女性像を、今日的視点からみることにし、歴史、文学、芸術の3分野に絞り13回構成とした。初年度の今年度は、長野県など15団体の協力を得、特に県連合婦人会との強い連携をはかった。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

今年度の番組は、「歴史の中の女性」、「島崎藤村の文学」、「近代芸術の女性たち」、「近代短歌の女性たち」の4部構成。教養部、人文学部の5人の教官が担当した。

内容的には4部門であるため、テーマに一貫性を保つため、主任講師には13回の講座すべてにおいて、テーマの意義、講座のポイントなどをプロローグとして挿入し、理解の手助けとした。また、講座対象の人間像を現代的視点から浮き彫りにするため、近親者や関係者らの生きた証言を可能な限り取材し、番組に変化と厚みを加えるよう工夫した。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

初年度のことしの放送は、12月6日（日）にスタートした。

この第1回の放送に合わせて行った聴取率の結果は、0.7%であった。必ずしも高い聴取状況とは言い難いが、30歳以上の女性に着実に聴取層を広げていることが推察され、今後の番組制作に展望を持つことが出来たと思う。

また、録音テープの貸し出しの問い合わせも多数あった。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

担当講師が、その専門分野を学問的に講義するだけに、内容的には立派だが、やや固いという声も聞かれた。

一般受けという観点から、制作上の工夫・演出をどう加えていくかが今後も課題だと思う。

(2) 番組制作担当者の所見

(ラジオ科目) 近代信州の女性たち ―歴史・文学・芸術にさぐる―

制作担当者： 信越放送ラジオ局制作部 山下 真須美

今年は初年度であり、立ちあがりが遅れたため、テキストの完成前に収録が始まるというあわただしいスタートであった。

講座1回目は序論とし、主任講師が実際に地域の中で女性問題と取り組んでいる人々のインタビュー等をまじえながら、全体のテーマ、講座のねらいについて語った。これは〈近代〉という時代の中で、先輩の女性達がいかに諸問題ととりくみ、解決をして来たかを、過去の問題として振り返るのではなく、現代の女性達の問題にひき寄せて考えて欲しいという意図からであった。そのためにも、毎回、主任講師に登場してもらい、担当講師と簡単にテーマについてのやりとりをし、全体の流れの中の位置づけを明確にするという方法をとった。

さらに、基本的には聴取者がテキストを持っていてもいなくても興味深く理解しやすいことをモットーに、各講師と相談。アナウンサーによる朗読、関係者への取材インタビュー、音楽などをできるだけ効果的に用いるようにした。

収録そのものは、できるだけ講師の方々の持ち味を生かせるようにと思うのだが、慣れ、不慣れの問題もあって、全体にもう少しリラックスした雰囲気があったらと思われる。その他、女性問題を取りあげるのに、女性講師がいなかったのが残念な気がした。

ともかくも初の講座で、準備から原稿書き、放送まで、短期間の仕事を果して下さった先生方は、さぞかし大変であったろうと思う。

ところで、講座としてははじめて聴取者と触れ合う機会であるスクーリングに何人が参加するか、幾分心配をしていたのだが、予想以上の参加者があり、担当者をホッとさせた。参加者の大半は女性であるが、延々3時間、講義と質疑応答がくりひろげられ、テーマへの関心の高さが実証された。続くスクーリングに大いに期待したいものである。



講座の概要

〈科目の概要〉

科目名	中心的なテーマ	科目のねらい	内容・方法
<p>農業新戦略 一夢のある明日 の農林業をめざ して— (テレビ)</p>	<p>農林業は、われわれ人類の生存にとって欠くことのできない衣食住およびエネルギー資源を供給する役割を担うべき重要な産業である。しかし、経済の高度化と国際化に対応し農林業の発展をはかるためには、すぐれた人材と研究開発にもとづく高度の技術革新を大きなよりどころとしなくてはならない。しかも農林業の技術は、それが立脚する自然の法則を最大限に活用する方向で開発されなくてはならず、ここに農林業におけるハイテクノロジー確立の課題が見出される。本講座ではそうした方向を模索することを中心のテーマとし、農林業の現代的意義および技術的視点から、わが国の農林業が自立し、夢のある展開をしていくための方途について考えることとした。</p>	<p>1) 農林業における高度の技術革新を実現するためには、農学の研究成果として得られた科学的知見を生かすことが不可欠であり、その重要性は従来にも増して高まっている。逆に農学は、そうした要請に応えられるものとして高度の発展を遂げることが強く求められている。そのためには、細分化された専門的研究をより一層深化させることが必要であり、研究の深化に応じて、学際領域における研究を進展させることも今後の農学の大きな課題であるといえる。</p> <p>2) 今後の農林業技術を展開させるためには、新しい基礎技術の修得が必要となる。本講座では農林業にかかわる技術者に対して適切な示唆を与え、彼等の技術導入に対して寄与する。</p> <p>3) 国民の理解と支持なしにはこれからの農林業の発展はない。国民の健康と生活の向上、住みやすい環境の保全に農林業が果たすべき役割を生産者と消費者が共に考えていくための素材を提供する。</p>	<p>1) 内容：長野県での農林業を対象にして生産技術の展開可能性を考え、そのような農林業が農林産物の生産に寄与しているだけではなく、環境保全に有効なだけでなく、地域文化の基礎にもなっていることを考えて、農林業の夢のある展開方向を提示していくことを内容とする。各回のテーマはそれぞれ独立しているようにみえるが、リサイクルを基本とする技術を高めるという視点でお互い密接な関連をもっており、それらの総合化のなかで新しい農林業の展開方向を示すよう試みる。</p> <p>2) 方法：講義をわかりやすくするために、テキストを出版する。そして、そのテキストを土台として、豊富な解説用図表、具体的な事例を撮影したスライドやVTRなど映像技術を駆使してテレビ放映をおこなう。県下数箇所の会場でスクーリングをおこない、視聴者と講師の質疑討論によって講義内容の深化を図る。</p>
<p>近代信州の女性 たち —歴史・文学・ 芸術にさぐる— (ラジオ)</p>	<p>国際婦人年もひとつの契機となって、わが国の女性問題はあらたな段階を迎えたといつてよい。それは、男女雇用機会均等法をめぐる女性の社会的位置のあり方や国政・地方自治などさまざまなレベルにおける政治・政策決定の過程に女性がどうかかわるかといった問題に現れている。</p> <p>一方、家庭のあり方と</p>	<p>1) 政治・社会・経済の領域における近代化の過程で、信州の女性たちが当初果たした役割はきわめて注目すべきものがあった。そうした諸事実を具体的に明らかにし、その歴史的諸条件を考察する。しかし、女性たちの役割は、近代化の進展につれてむしろ低下する動きを示す。それは何故か。また、近代化にともなっ</p>	<p>1) 内容：近代信州の日本近代化に果たした独自性を明らかにしながら、日本近代化の特質にふれ、信州近代の女性たちの歩みを、政治・社会・経済・労働などの分野、近代文学の一典型を示す島崎藤村の文学に現れた女性群像、芸術と深くかかわった女性たち、近代短歌に歌われた女性の姿や近代詩歌の道を歩んだ女性</p>

科目名	中心的なテーマ	科目のねらい	内容・方法
<p>近代信州の女性たち —歴史・文学・芸術にさぐる— (ラジオ)</p>	<p>それに関連するさまざまな問題は、女性の生き方はもとより21世紀の日本人すべての生き方の根幹にかかわる問題として検討を迫られている。女性の役割は、社会・経済・政治から文化にわたるさまざまな領域においてますます重要性を増すことは国際的に見ても明らかである。</p> <p>女性問題は、信州といった地域社会において見ると、その社会のあり方やそこに住む人々社会観・人間観と深くかかわっている。本講座は、信州の女性たちの、日本近代化のなかに生きた軌跡を辿りながら、それら諸問題を多角的・総合的に問い直すことがねらいである。</p>	<p>て現れた日本近代固有の女性問題にたいして、近代信州の女性たちはどう対処したか。その軌跡を具体的・論理的に明らかにし、女性が政治・社会・経済の領域で生き生きと活躍できた諸条件をさぐる。</p> <p>2) 近代文学は、家制度が女性の自立や活躍の場を大きく制約したことを克明に追究した。島崎藤村の文学はその典型といってもよい。それはまた、近代的男女関係のあり方さらに理想的な家族の創出への努力の営みの追究でもあった。また、芸術をめぐる女性たちの生きざまは、近代日本の女性問題の歴史的な性格を告発するものであり、その社会的制約を乗り越えて進もうとするいくつかのドラマを歴史のなかに刻印している。信州は、近代詩歌の確立・発展に重要な役割を担った風土であり、そのなかにさまざまな女性の動きがあった。文学・芸術などにおける信州女性のあり方にひとつの焦点を置き、広く近代日本さらには近代世界の女性のあり方をも視野に入れながら、近代と女性のかかわりを考察する。</p> <p>3) 信州の近代化と女性をめぐる上記のような考察を素材としながら、21世紀の近づいた現代日本における女性問題を考え、聴取する人々が抱えている個々の問題を広く深い視野から再検討する機会に活用してもらうよう努める。なお、講師の大学における講義などにも、教材として利用できるよう工夫する。</p>	<p>など4部構成とし、多角的・総合的に女性問題を明らかにする。</p> <p>2) 方法：講義を理解しやすくするため、テキストに写真・図表などを豊富に入れ、ラジオの特色を生かすため、朗読や関係者へのインタビューなどによる多面的な構成を考える。また、県内数箇所の会場で、スクリーングを行い、聴取者と講師の触れ合う場をつくるとともに、質疑・討論によって講義内容の理解をいっそう深める。</p>

## 〈各科目の構成〉

(テレビ科目) 農業新戦略 — 夢のある明日の農林業をめざして —

主任講師：農学部 教授 菅原 聰  
" 教授 細野 明 義

放送日	放送月日	中心テーマ	担当講師
第1回	10月3日	風土と農業	農学部教授 熊代克巳 経済学部教授 伊藤松 教養部教授 藤田克喜
第2回	10月10日	土づくりを考える	農学部教授 熊代克巳 " 教授 高橋井野 " 教授 酒井野 " 助教授 酒保
第3回	10月17日	品種で勝負	農学部教授 氏原暉男
第4回	10月24日	野菜づくり最前線	農学部助教授 有馬博 長野県野菜花卉試験場野菜部長 藤森基弘
第5回	10月31日	うまいくだものづくり	農学部教授 熊代克巳
第6回	11月7日	資源を活かす畜産	農学部教授 檀原宏 " 助教授 唐澤豊
第7回	11月14日	ミルクの神秘	農学部教授 細野明義 " 助教授 大谷元
第8回	11月21日	森を育てる	農学部教授 菅原聰 理学部教授 只木良
第9回	11月28日	間伐材を活かす	農学部教授 青木純 " 教授 重松善 " 教授 酒井本一 工学部非常勤講師 宮信忠
第10回	12月5日	緑のダム・森林	農学部教授 中野秀 理学部教授 只木良 教養部教授 松田章 二
第11回	12月12日	汚水も貴重な資源	農学部教授 酒井信 繊維学部教授 桜井善 農学部助教授 入江鏝 三
第12回	12月19日	これからの害虫防除	農学部教授 酒井信 " 教授 富田一 長野県野菜花卉試験場主任研究員 北村泰三
第13回	12月26日	夢のある農林業をめざして	農学部教授 桂原瑛 " 教授 菅原善 経済学部教授 伊藤善 一聰雄

(ラジオ科目) 信州の女性たち —歴史・文学・女性にさぐる—

主任講師：教養部 教授 上 條 宏 之

放送回	放送月日	中心テーマ	担当講師
第1回	12月6日	信州の近代化と女性 —序論—	教養部教授 上 條 宏 之
第2回	12月13日	第1部 歴史のなかの女性 1. 明治維新と女性 —松尾多勢子を中心に—	人文学部教授 高 木 俊 輔
第3回	12月20日	第1部 歴史のなかの女性 2. 富民殖産と女性 —横田 英をめぐって—	教養部教授 上 條 宏 之
第4回	12月27日	第1部 歴史のなかの女性 3. 婦人参政権と製糸労働 —信州民衆女性の歴史から—	〃
第5回	1月10日	第2部 島崎藤村の文学と女性たち 1. 『春』 —操と勝子の恋愛を中心に—	教養部助教授 橋 浦 史 一
第6回	1月17日	第2部 島崎藤村の文学と女性たち 2. 『家』 —橋本 種をめぐって—	〃
第7回	1月24日	第2部 島崎藤村の文学と女性たち 3. 『新生』 —節子の生き方—	〃
第8回	1月31日	第3部 近代芸術と女性たち 1. 相馬黒光と芸術家群像 —中村屋サロンの主人として—	教養部教授 仁 科 惇
第9回	2月7日	第3部 近代芸術と女性たち 2. 芸術・恋愛と女性 —松井須磨子と演劇—	〃
第10回	2月14日	第4部 近代詩歌と女性たち 1. 近代短歌の女性像 —赤彦と空穂の作品にみる—	教養部教授 西 村 真 一
第11回	2月21日	第4部 近代詩歌と女性たち 2. 短歌の道を歩んだ女性たち(1) —若山喜志子と四賀光子—	〃
第12回	2月28日	第4部 近代詩歌と女性たち 3. 短歌の道を歩んだ女性たち(2) —今井邦子と斎藤史—	〃
第13回	3月6日	座談会 信州の近代化と女性 —まとめに代えて—	教養部教授 上 仁 西 高 橋 〃 教授 條 科 村 木 浦 〃 教授 宏 真 俊 史 人文学部教授 之 惇 一 輔 一 教養部助教授

〈スクーリング〉

(テレビ科目) 農業新戦略 一夢のある明日の農林業をめざして一

回	略称	関連する放送	実施場所	実施日時
1	畜産	資源を活かす畜産 ミルクの神秘	長野市 信州大学工学部	昭和62年11月14日(土) 10:00~12:30
2	品種 ・野菜	品質で勝負 野菜づくり最前線	長野市 長野県食品工業試験場	昭和62年11月21日(土) 13:00~17:00
3	森林 ・木材	森を育てる 間伐材を活かす	佐久市 長野県佐久創造館	昭和62年11月28日(土) 9:45~12:00
4	風土 ・地力	風土と農業 土づくりを考える	松本市 信州大学教養部	昭和62年12月5日(土) 13:00~17:00
5	水	緑のダム 一森林一 汚水も貴重な資源	岡谷市 岡谷市公民館	昭和62年12月12日(土) 13:00~17:00
6	果樹 ・虫	うまいくだものづくり これからの害虫防除	飯田市 飯田中央農協飯田支所	昭和62年12月19日(土) 13:00~17:00
全体会		夢ある農林業をめざして および全放送分 [修了証書授与 農学部見学 懇親会]	信州大学農学部講義室 見学:農学部構内 懇親会:信州大学生協 (農学部)食堂	昭和63年1月9日(土) 13:00~17:30
見学会		風土と農業 土づくりを考える 野菜づくり最前線		昭和62年8月6日(木) 8:30~17:00 昭和62年9月26日(木) 13:00~16:40

\*第1回スクーリング当日の放送は、各会場において視聴できる。

(ラジオ科目) 近代信州の女性たち 一歴史・文学・芸術にさぐる一

回	テーマ	内容	実施場所	実施日時
第1回	歴史と女性	第2~4回	伊那市伊那市立伊那公民館	昭和63年1月16日(土) 13:00~16:00
	藤村文学 と女性	第5~7回	上田市上田市立中央公民館	昭和63年1月30日(土) 13:00~16:00
	芸術と女性	第8~9回	長野市長野勤労者 福祉センター	昭和63年2月13日(土) 13:00~16:00
	詩歌と女性	第10回 ~12回	諏訪市諏訪文化センター	昭和63年3月12日(土) 13:00~16:00
第2回	近代信州の 女性たち	第13回及び 全放送分 修了証書授与 交流会	松本市信州大学教養部	昭和63年3月19日(土) 13:00~17:00

信州大学

〈 再 視 聴 〉

(テレビ科目) 農業新戦略 一夢のある明日の農林業をめざして一

実施場所	実施期間・日時	備考
伊那市公民館	昭和62年11月～昭和63年1月の毎週土曜日 14:00～16:00	伊那市
信州大学繊維学部 講義室	昭和62年10月6日～昭和62年12月22日の 毎週火曜日 及び 昭和63年1月5日 10:00～12:00	上田市
信州大学工学部 講義室	〃	長野市
信州大学教養部 講義室	〃	松本市

(ラジオ科目) 近代信州と女性たち 一歴史・文学・芸術にさぐる一

実施場所	実施期間・日時	備考
信州大学教養部	昭和62年12月～昭和63年2月の毎週金曜日 14:00～16:00 (ただし昭和63年1月1日は除く)	松本市
信州大学教育学部	〃	長野市
信州大学農学部	〃	伊那市
信州大学繊維学部	〃	上田市